

# 廣福寺だより

31号



## 前任職・前々任職 法要

### 前任職 釋惠信 七回忌 前々任職 釋惠応 二・三回忌

五月二一日、二二日に当寺前任職 釋惠信の七回忌、前々任職 釋惠応の二・三回忌の年忌法要を勤めさせて頂きました。二一日には大勢の門信徒の皆様にお参りを頂き、大変にありがとうございました。

相導師(あいどうし)の吉田本町広海寺様御任職をはじめ、法中(ほっちゅう)六か寺の御寺院方の出仕を頂きました。翌日(二二日)に親戚、世話方の出席を頂いて、寺の場合には二日間にあつて法事を勤めます。法中の御寺院方にも、御多用の中を連日お勤め頂きました。

私たちの法中の七か寺は浄土真宗の教えを共に学びながら、はるか昔から互いに研さんしあい、冠婚葬祭の折りには協力を惜しまず助け合ってきた仲間であり、寺の隣組なのです。

- 吉田町本町 広海寺様 (御導師様)
- 寺泊町 聖徳寺様
- 寺泊町 長善寺様
- 寺泊町夏戸 本光寺様
- 分水町中島 大蓮寺様
- 出雲崎町 万因寺様 (前任職姉の嫁ぎ先)

# 世話方研修会の会場に

平成二十三年の親鸞聖人七百五十回大遠忌に向けて、また平成十九年からの御門主様の新潟教区御巡教を前にして「真宗寺院における世話方の役割」というテーマで、世話方研修会が開催されました。

お天気となった七月十一日(月)の朝、新潟教区全地域から三十カ寺の世話方八十二名、寺族三十四名の総計百十六名の皆様から会場の広福寺に御参集いただきました。

実は前日に御門徒さんの葬儀があり、そのあと自坊の世話方の皆さんと会場設営等の準備、それから夕方に燕三条駅にお着きの藤田徹文師をお迎えして接待と、ハードスケジュールでした。何か見落としがありそうでしたので、何か見落としがありました。教区の御寺院方、自坊世話方の御力をいただき、無事に運営することができました。心より御礼を申し上げます。

前回の世話方研修会は平成十一年に寺泊の聖徳寺様会場、前々回は平成五年に黒鳥の威徳寺様会場で行われましたので、六年ごとのペースになっています。御講師の藤田徹文師は威徳寺様会場のときにご講話をいただきましたので、世話方研修会としては十二年ぶりになりますが、広福寺には「見



敬会」にお出で頂きましたので二年ぶりです。他宗の寺院とは異なる、真宗寺院の成り立ちからお話を始めていただき、真宗の教えをお説きになる中で、世話方の役割をお話しいただきました。質疑応答の後、庫裏で昼食。午後は花井教務所長からのお話、本山大谷宗務総長からのお話をいただき、最後にまとめの講話を藤田師からいただきました。

各御寺院の世話方の皆様から、感謝して頂きました。自坊の世話方は、広福寺が二年前に第七次開法推進員の「見敬会」会場となり、藤田師の御法話をお聞きしておりましたので、楽しみにお待ちしております。当日はどんな質問にも的確にお答えいただき、姿に「さすがだなあ」「家内も聞きたがっていたのに残念だったなあ」と声ももれておりました。広福寺だけでお招きして、また御法話を頂きたいと思っております。

# 「お念仏の中の生活」

見敬会で法話

藤田徹文先生

—前号のつづき—



です。瞋りの煩惱で地獄を作って地獄で苦しんでいるのが私たちです。他人が作るのではないのです。

こんなことを言ったら怒られるかもしれませんが、どちらかと言うと、女性が鬼ででしょう。男性は亡者です。男は言い訳ばかりします。時たま選手交代することもあるのですが、だいたいそうだと思います。どうかと言ったら、昔からあんまり「鬼じい」とは言わない。……そのあとは私は言いませんよ。選手交代することはあっても、責める側と言いつくす側が地獄です。

地獄というのは私と関係ないということではないのです。私自身が今、瞋りの煩惱を主として地獄を作って、その地獄の中で苦しんでいるのです。何かあったら、「あんたはつまらん、あんたがどうや」と顔色を変え、反対に「仕方なかった」と言って逃げています。そんなことで苦しめ合っている世界が地獄です。自分が地獄を作って苦しんでいるのに、相手が悪いからこうなったと言う。自分はどうしても悪くないと言うのです。

地獄のことを「火塗」と言います。火は怒りの炎です。怒りの炎でわが身を焦がし、人の身を焦がしている。そういうのを地獄というのです。

私たちは、自分ではまともに生きていて思っているけど、知らない間に、迷いの家の中を行ったり来たりしているのです。一日三往復くらいする人もいます。人身を受けたということは、そういう人生を断ち切って、さどりの人生に転ずるチャンスも、今もらっているということです。みなさんも今、仏法を聞いて自分に目覚め、この迷いの家から抜け出さなかつたら、永遠に迷いから迷いへと繰り返します。

だからこの身を頂いたときに、まず考えないといけないことは、迷いを抜け出すということです。その為には、聴聞をしないといけないのです。聴聞するには元気でいなければならないのです。その為には身体もいたります。そのために仕事もするのです。なんでこの身体をいたわらないといかんのか。この身体が元気でないと、仏法をちゃんと聞けないからです。だから一番大切なことは、聴聞して仏法に出遇って、迷いの家を出ることです。



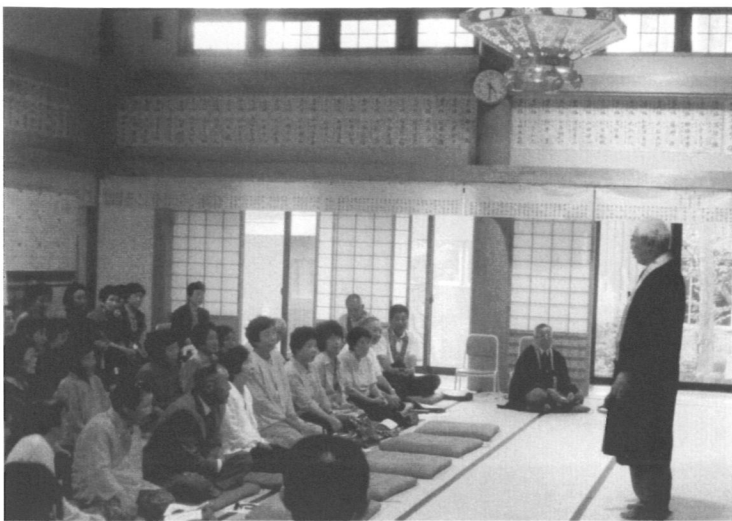
鬼と亡者がペアで住んでいる所を「地獄」と言います。だからどんなに立派な家を建てて、人がうらやむような家に住んでも、何かあると顔色を変えて他の家族を責め、反対に自分のときは仕方がなかったと逃げる。そんな生きものがいて傷つけ合っている場所は家庭ではないのです。そこは地獄なの

## 鬼と亡者の住むところー地獄

鬼と亡者がペアで住んでいる所を「地獄」と言います。

### 愚かさの生活ー畜生

もう少し「迷いの家」を説明しましょう。次は「畜生」です。畜生というのは、愚痴、愚かさの煩惱を主とする生きものです。どういふのが愚かなのか。仏教では、学校の成績が悪いのが愚かだというのではないのです。学校の成績が悪くても、賢い人はい



ます。この頃は学校の成績だけで賢いとか賢くないとか言うけれど、そうではないと思います。どんなに学校の成績が良くても、自分というものが見えてないような人間は愚か者です。私の「いのち」は今どこにいるのか、どこにあるのか。私たちの「いのち」は、本当はたくさんさんの「いのち」に取り囲まれ、たくさんさんたくさんさんの仏様方に守られて生きているのです。

「南無阿弥陀仏をとふれば、十方無量の諸仏は、百重千重圍繞して、よろこびまもりたまふなり」(『現世利益和讃』)

と親鸞さまはよろこばれました。私はたくさんさんの仏様に守られ、わが「いのち」を撰取して捨てることのない、常にわが「いのち」を照らし、わが「いのち」を暖め、わが「いのち」をしっかりと守って下さる、お慈悲の真ん中で生かされて生きているのです。

この大きなお慈悲のあることを忘れて、自分は一人で生きていると思っているのが愚かということです。私は人の世話になったことがない。私はいつもひとり。しまいは言うに事欠いていい年をした人が「若いもんの世話にならん」と言う。そんなことを言う人がいます。言ったらいけません。

絶対に世話になるのですから。どんなに腹が立ってもね「わしは若いもんの世話にならん」、これだけは、口が裂けても言ったらいかん。どうしてもカーツとなった時は、「わしは若いもんの世話に」というところで止めてね。「呼吸おいて「なります」と言いました。」「世話にならん」と言ってしまったら、これはもう、それこそ若いもんが横を向きますからね。私たちは絶対若いものの世話にならないといけないのです。人間は一人で生かれないのです。なるべく世話にならんように気をつけていても、他の「いのち」の世話になつていくのです。だから「私は自分一人で生きている」と言うのが一番愚か者です。

### わたし一人が苦勞

だいぶ古い話ですが、あるばあちゃんがこんなことを言いました。ご法座の後でお茶を飲んで話をしていたら「ご院家さん、私たちみたいな年齢好のもんが、一番損な時代に生まれてきたような気がします」と。恵まれたいい時代に生きているのに、どうしてそんなことなのかと思う、「ばあちゃん、どうしてそんなふう思うの」と言っ

たら、「ご院家さんは知らんだらうけど、私が嫁に来たところは姑が強かった」と言うのです。いつの話かという、六十年程も前の話です。「私が嫁に来たときには、姑は強かった。だからしたいことがあつてもできん。買いたいものも買えん。来る日も来る日も姑の顔色見ながら、気をつかって気をつかって小さくなって小さくなって、日を送つたものだ。それが私たちの若いときの時代や。」とおっしゃる。そして「所帯を譲ってもらつて、さあこれからという時は戦争になって難儀した」とおっしゃる。それこそ弾の下で小さくなっていったという。だから一番いい時は戦争で苦勞して、やっとご主人が帰ってきて共に苦勞して、若いものも立派に育ち、若いものに所帯を譲つて、さあこれからは少し気ままにさしてもらおうと思つたら、時代がころつと変わつて、若いものの方が強くなった。この頃は明けても暮れても嫁の顔色を見ながら小さくなって生活している。わが人生を振り返つたらずっと小さくなりつ

ばなし。若い時は姑の前で小さくなり、元氣な時は戦争で小さくなり、この頃は嫁の前で小さくなつて。ずっと小さくなりつばなしが、私たちの年代の者の人生です、と話されました。

そこで「ばあちゃん、そういえばまた最

近一段と縮んだね」冗談を言いますと、「ええ、縮みました」とまじめにおっしゃる。

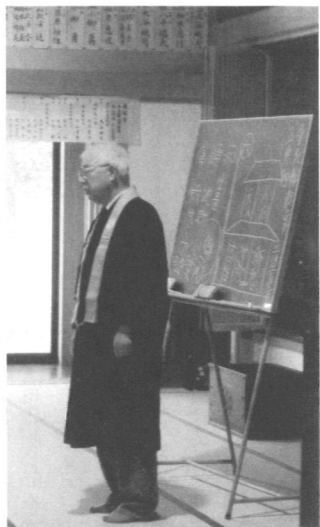
こんな話が始めると、同年輩の人は「ほんと、ほんと、私もそう」「うちもそう」と話がよく合います。寝ている人まで目を開いて「ほんと、ほんと」と言います。寝ているのかと思つていたら、自分に都合のいいところは聞いています。

最後にそのばあちゃんは「時代が変わつているのに、今さらこんなこと言つてみるも始まん」「いや、言うだけ自分の立場が悪くなる。若いもんが機嫌悪くするから、言いたいことは腹いっぱいあるけど、言わんように言わんように、私一人で辛抱している」とおっしゃいました。そしてさらに「うちの家が何とか無事にいつているのも、私が一人で辛抱して、言いたいことを言わずに我慢しているからだ」と。なんと気の毒なばあちゃんやなあと思つて私は聞いていました。しかしその割にはのんきな顔をしているぞと思ひました。



ところがね、それからしばらく経つて、そこのお嫁さんに会つたのです。お嫁さんが言うのです。「このごろの年寄りはい」と。えらく話が違ふなと思ひました。「この前、おたくのおばあちゃんがこんなことを言つておられましたよ」と言つたらけんかになるでしょう。私もそれくらいは心得ていますから、口から出かけたのを喉の辺で止めた。そして知らん顔で「なんで年寄りがいいの」と聞いたら、「ばあちゃん見ると、ほんとに氣楽に出て歩く」と言うのです。「今日は老人会や、今日はどこどこやと出て歩く。私ら出て歩きたくても子供が小さいし、主人がおつたら思うようになかなか出られない」と言うのです。「それに比べてばあちゃんなんて、ほんとに氣楽に出て歩く。だから年

### 1961年の春はいつ



「わし族」と言うのです。男の人は定年後「わし族」になつて、奥さんの後をついて回る。だから奥さんが亡くなつたらどうしていいかわからなくなる。男は年を取ると、知らない間に女性にもたれかかるのです。だから、奥さんが亡くなるついでうことは、つかい棒がとれたみたいなのです。だいたい平均三年だそうです。奥

うのを「わし族」と言うのです。男の人は定年後「わし族」になつて、奥さんの後をついて回る。だから奥さんが亡くなつたらどうしていいかわからなくなる。男は年を取ると、知らない間に女性にもたれかかるのです。だから、奥さんが亡くなるついでうことは、つかい棒がとれたみたいなのです。だいたい平均三年だそうです。奥

さんを亡くしたご主人の平均余命は。(最近五年だそうです)だから男は奥さんを大事にしないと長生きできません。これは平均の話ですから、みんながみんなじゃないですよ。奥さんを亡くしてから二十年、三十年生きる人もありますからね。

それに比べて女の人は、ご主人を亡くしてから何年生きるか。男は三年。女はね、ご主人亡くしてから平均十五年(最近のデータは二十二年)生きるそうです。だから、女の人は夫を亡くしてから、もう一回、春が戻るみたいなものですよ。ご主人がいる間は自由に家から出られなかったけど夫を送った後は自由に出て歩くのです。

### 役に立たない

また、この頃お年寄りには家においても役に立たない。なんで役に立たないのかというと、この頃みんな電化でしょう。電化製品を下手に触つたら壊します。

私なんかもたまに寺にいる時に、電話がかかってくると怖いんです。私にかかった電話なら私が出るからいいのですが、息子にかつたり坊守にかかるでしょう。私と息子は本堂を挟んで反対の方に住んでいるのです。五十メートルか六十メートル離れ



奥さんにしても若い時ならいざ知らず、年取つてべたべたされたらかなわないから、なるべく離れようと思つて「お父さん留守番しといてね、買い物行くから」と言う。ご主人が「わしも行く」と言う。「わしも、わしも」とどこへでもついて行く。そういう

ているのです。息子に電話がかかつたら、息子の部屋に電話を切り替えればいいのですが、うまく切り換えられない。普段家にいないから、息子の部屋の電話が何番かわかりません。私のところは建物バラバラなのです。電話がかかつてきて「息子さんお願いします」と言われたら、私は死ぬ思いをするのです。「ちょっと待ってください」と受話器を上げると、息子呼びに走つて行くのです。私は若いときラグビーをしていましたが、今頃五十メートルも走つたら、心臓が止まりそうになります。そして、ひっくり返りそうになり「おーい、おーい」と、二階の息子と呼ぶんです。「おまえに電話やで」と言ったら「それならこっちで取る」と言う。そんなことができたなら、走らないのです。それでしようがなく息子は急いで走つて行きます。そして電話を切つたあとで文句たらたら。せつかく私が息が切れるほど走っているのに怒られます。でも息子はまだいいのです。坊守に電話がかかつたら、どこ

んがいて「ご院家さん、久しぶりですなあ」とおっしゃる。「これ今度の法座の案内だから参つてや」と言う。「わかりました。できるだけ参らせてもらいます」とおっしゃる。帰ろうと思つたら「お茶を飲んで行きなさい」と繰り返しておっしゃる。それで玄関先に座りましたら、ばあちゃんは「待つて下さい」と言つて中に入ったまま、五分経つても十分経つても出て来ない。どうしたのかなと思つて、勝手知つたる門徒さんの家なので台所をのぞきに行くと、ばあちゃんはポットとにらめっこして居るんです。「ばあちゃん、どないしたんや」と言うと「ご院家さん、このポットはどこを押したらお湯が出るんですか」とお聞きになる。そしてばあちゃんがグチるのです。「うちの嫁は新しいもの好きで、前のがまだ使えるのに知らない間に新しいのに替えてるから、私が恥をかかないといかん」と、おっしゃる。それで「わかつた。私がやります」と結局自分でお茶を入れて、飲んで帰りました。

比べて私たちは出たくても出られない」とおっしゃる。さんさん愚痴をこぼした挙げ句に「十五年も経つて今さらこんなこと言つても始まらないので、私一人で辛抱してます」とおっしゃるんです。何とこの家はばあちゃん一人で辛抱してると思つたら、お嫁さんも一人で辛抱して居るんです。一人で辛抱してる人が二人おるわいと思ひました。

先だつてもご門徒のお宅に配りものを届けに行つたんです。するとそのばあちゃん

だから、ばあちゃんは家にも用もないし、用もないのに家にいたら嫁もしんどかろうと用を作つて出るんでしょうが、家にいる者からしたら、遊びに行つたと思うんでしょね。それでお嫁さんは「ばあちゃん



奥様と……

## 辛抱してる人が三人

それからしばらくして、そこのご主人に会って話をしました。「家のばあちゃんがいつも寺に参らせてもらってお世話になります」とおっしゃるので、「いつもお元気で結構です」と言います。「この年になっても母親が元気でいてくれる。こんな幸せなことはありません」と、本心か口先かはわかりませんが、そうおっしゃる。「奥さんもなかなかしゃんとした方で」と言いますと、「あれも私には過ぎた女房で喜んでおります」とおっしゃる。「ばあちゃんの方を向いて喜び、お嫁さんの方を向いて喜ぶ。喜びと喜びの真ん中におられるのですから、ご主人幸せですね」と言いましたら、「幸せじゃないんです」とおっしゃるのです。「私は、二人の真ん中にはさまって、一人で苦勞してる」とおっしゃるのです。さてもこの家は一人で苦勞する人ばかりいる家だと思いました。

いいことがあったら私の手柄ですが、悪いことがあったら嫁のせい、ばあちゃんのせい、主人のせい、となっているでしょう。それを愚か者というのです。人間は一人で苦勞できないのです。苦勞できているということは、それを支えてくれている人があつて苦勞できているのです。私が辛抱している時、となりも辛抱しているのです。みんなに生かされ、みんなと共に生きているのち、それが分からなくなっている者を愚か者と言うのです。だからどんなに学校の成績が良くても、「私が一人で」と言う者は愚か者です。頂きたいのち、生かされているのちが、今どっちを向いて生きているか方向が分からない。

「先生、私は死んだらどこへ行くのでしょうか」と尋ねる人がいます。「知らない」と答えます。分かりませんよ、そんなこと。皆さん、道を歩いているとき、知らない人が寄ってきて「ちょっとお尋ねしますが、私どこへいくのでしょうか」と尋ねたら答えられますか。知らないと答えるしかない、そんな人がおられたら心配ですから警察に



連絡して保護願いを出さないといけません。賢そうな顔をしていても、実はどこへ行くかわからないままに、同じ所をうろろしている、それを生死輪転といいます。行ったり来たりして輪を回っているようなものでしょう。そういう、生かされていることも分からないし、どちらを向いて生きているのかも分からない、ただ今さえ良かったらいい、明日のことを忘れ、人のことを忘れて自分さえ良かったらいいと居眠りしているような生き方をしているのを「畜生」といいます。犬や猫の話をお仏教がしているのではないのです。

## 「360度」の切り替え

私たちの人生はどうなっているのでしょうか。三塗の世界を右往左往しているのではないのでしょうか。それを切り替えて、さとの世界に向かうというのが、この身を頂いた意味なのです。だから、せっかくこの身を頂いても、三塗さんずの黒闇こくあん(地獄・餓鬼・畜生)で終わってはいけません。どうしたら「いのち」の切り替えができるかという問題、迷いの原因は「わしが」という「我」です。この「我」のこだわりというか「我」の癖を出ないといけないのです。どうしたら出られるかを教えて下さるのが仏教です。私たちがこの「いのち」を頂いて、一番急がなければいけないこと、一番大事な問題を「一大事」というのです。その一番大事な問題は「我」を出、離れるということです。言葉を変えたら「往生」です。出るまゝが「往く」ということ。離れるまゝが「生まれる」ということ。だから「往生」です。どこへ往くかということ「お浄土」です。ほんとうに光り輝く、「無量光明土」。光の世界に往き、生まれることが「一大事」です。せっかくこの身を頂いても、このまゝに終わったら、元へ戻ってしまう。そんな「いのち」のあり方を繰り返すことが空しいのです。だから、せっかくこの身を頂いたのですから、迷いを出る算段をしないといけないのです。

どうしたら迷いから出られるのか。お釈迦様は、いろんな道を教えて下さった。それを実践できる人は、阿弥陀様の世話にならなくても自分でやればよいのです。お釈迦様の教えて下さった道の一つを言います

と「正しい生き方」をするという道です。正しく生きるとは、先に言いましたように、人間は一人で生きている訳ではなく、どんな時でも誰かに支えられて生きている。みんなと共に生きている。みんなに生かされ、みんなと共に生きているのです。みんなに生かされているのだから、私も己のことは忘れても、みんなのことは忘れないように、みんなを大事にして行こうというのが「正しい生き方」です。

## 共に苦勞をする

だから、この頃私は思うのです。例えば結婚すれば幸せになると思っている人が多くいでしょう。あれが、そもそも間違いないです。だいたいこの世は苦の世界ですから、結婚しても苦、結婚せんでも苦です。だから、結婚したから急に幸せになる訳はないのです。「共に白髪になるまでお幸せに」なんて祝辞を述べる人がいますが、自分がそうならない人が、堂々とかういう祝辞を述べる



のです。よくあんな空々しいことが言えるなあと思います。昔の人は、「幸せになろう」と言って結婚したのではないのです。どっちにしる苦勞しないといかんけど、この人となら苦勞のしがいがあるという人と一緒になったのです。この世は娑婆で、どこへ行っても苦。一人でも苦、二人でも苦。でも、共に苦勞できる人があつたら「鍋釜提げてでも」と言って結婚したのです。いっしょに苦勞してもいい人と出会うということ。それなのに「こんな人と一緒になったおかげで苦勞させられた」と言う。実は初めからそうなのです。当たり前のことなのです。苦勞する覚悟で一緒になっている

のですから、苦勞して当然です。それを幸せになろうと言うのは、思い違いです。挨拶する年寄りが、自分たちは夫婦喧嘩ばかりしているながら、結婚式では「共白髪になるまで幸せに」と、よくあんなことが言えるなあと思います。

苦勞しても後悔のない人と一緒にいるのが結婚です。みなさん、そうなっていますか。結婚とは、この人となら共に苦勞を味わって、いこうと一緒になるのです。それを、この人と一緒にあったら自分は幸せになる、というのは大間違いです。

### 正しい生き方

「正しい生き方」というのは、みんなに生かされているのだから己のことを忘れて、相手を忘れないように、相手を大事にすることなのです。それなのに、私たちは、いざとなったら人のことは皆忘れて、自分のことばかり言うでしょう。ここが間違っているのです。

正しく生きるとは、常に己を忘れることです。ですから「わしが」なんて無くなってしまう。自ずから「我」の執ととわれを出します。「わしが」にとらわれなかったら、煩惱にもとらわれないから、迷わなくなるのです。

みなさんも今日から早速、この「正しい生き方」をして下さいと言っても、なかなかできないでしょう。身近な例で言うと、夫や夫やと言っても、一人で夫になりません。妻あつての夫です。だから、夫の立場の人は、妻によって夫にしてもらったのですから、自分のことは忘れても妻を大事にしたらいのです。妻の立場の人は夫によって妻にしてもらったんだから、己のことを忘れても夫を大事にして行く。嫁と姑も同じことです。相手を大事にしていくのが正しく生きるということです。

私はしょっちゅう外に出ていますから、寺はほったらかしです。何でもそんなことができるのかというと、ひとえに坊守のおかげ、副住職の息子のおかげ、門信徒のおかげです。私は門信徒の人達とめつたに顔も合わせません。一年に一ぺん会ったらいくらいいです。下手したら二年三年と顔を合わせないこともあります。それでも門信徒の方は、顔を合わせたら「どなたでした」と言わないで「ご院さん」と言って下さる。「ご院さん、しばらく顔見なかったけど元気でしたか。どうしてましたか」と言って下さるから、わしは住職でおれるのです。

だから、私が自分の力で住職になつているのは違うのです。坊守に支えられ、息子



良寛様と先生と推進員

子に支えられ、門信徒に支えられているのです。だから、どんなに疲れて帰っても、己を出さんようにして、己のことを忘れても、相手を大事にしないといかんのです。ですから、どんなに疲れて帰っても、帰って坊守の顔を見たら、何より先に「ありがとう」と言わなければいけないと思つていられるのです。思つていられるけど、なかなか「ありがとう」

が出来ません。話はわかつていてもその通りやれるかっていうことが一番の問題です。やれる人は、これをやればいいのです。教えられたことをその通り実践しようと頑張つているのが聖道しょうどうもん門。ひじりの道です。

### 念仏に遇あひ

私たちは悲しいかな、聞いても聞いても、なかなかやれない。私の場合は、自分でわかつたつもりで話しているながら、なかなかそのとおりに出来ない。そんな悲しい人間を凡夫ぼんぷというのです。そんな凡夫が、どうしたら「我」の執ととわれを出られるのか、ということが浄土真宗の問題です。

親鸞聖人は、念仏に遇あひしか凡夫が「我」を出る道はないとおっしゃいました。私たちの救われていく道、「いのち」の切り替えは念仏によってしか実現できないのです。それが親鸞聖人のみ教えです。

念仏とは、わが「いのち」を撰取して捨てることのない、大きな「いのち」の世界から「どんな時でもお前を捨てない、わたしがいるのだから、こんな小さな『我』の中で力んで気張つて一人相撲を取つていないで広い世界に出よ、目を覚ませ」とよびかけて下さるよび声である南無阿弥陀仏です。



五合庵での推進員

このよび声がこの身にほんとうに受け取れた時に、私たちは「我」から出られるのです。これしか私たちの救われる道はないのです。話を聞いて頭でわかつたという話ではないのです。この身によび声がほんとうに届いたということです。

ことです。だから「称名忘るまじき」。称えるつていうことは聞くということです。声を出すということは一番大事な意味は、他の人に聞いてもらうのも大事ですが、わが身に聞き開くということです。わが身に、如来様のよび声を聞かすのです。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と。

ですから、念仏は私が称えても、それは如来様が私のことを心配してよんで下さるよび声です。念仏は、私がお願ひしたり、何かをねだったり、仏様にああせいこうせいと強要する言葉ではないのです。知らず知らずのうちに「わしが、わしが」と言いながら、三塗の黒闇の中で終わつてしまふ私、そんな私を案じて大きな「いのち」の世界からよんで下さるよび声が念仏です。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と。念仏しながら、そうだった「わしが」じゃなかった、大きな慈悲の中にみんなの人に支えられていた「いのち」だったと目覚めさせていただくのです。「わしが」じゃなかったなあ、よび声に出遇つて目を覚ましてもらつて「我」を出る以外に、私たちの救いはないのです。だから、話はこれだけです。けれども、そのことがほんとうにこの身に聞こえることがなければ何にもなりません。この身に聞こえることが大事です。

平成16年度 勸金決算書

＜収入の部＞

科 目	予 算 額	決 算 額
勸 金	2,600,000	2,620,000
雑 収 入	5,000	23,417
繰 越 金	290	290
計	2,605,290	2,643,707

＜支出の部＞

科 目	金 額	内 訳
1. 寺務経常費	2,638,480	
(1)負担金	812,410	本山護持金 教区費 ともしび代 光寿堂維持管理費 本山御仏供米料
(2)事務通信費	292,495	複写機リース代・印刷費 用紙・領収書・切手葉書封筒
(3)会 議 費	110,376	世話方会議・総代会議
(4)教 化 費	278,175	本山御使僧様法礼・聞法会 広福寺だより・カレンダー代
(5)営繕管理費	1,125,024	火災共済・消防設備保守点検 電気灯油代・庭木剪定・ 冬囲い 書院天井・床修理工事
(6)門徒交際費	20,000	水害見舞金(御門徒)
2. 積 立 金	0	
計	2,638,480	

総収入 - 総支出 = 5,227 (次年度へ繰り越し)

平成17年度 勸金予算書

＜収入の部＞

科 目	予 算 額
勸 金	2,600,000
雑 収 入	5,000
繰 越 金	5,227
計	2,610,227

＜支出の部＞

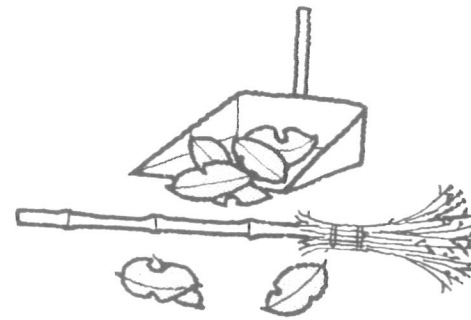
科 目	予 算 額
寺 務 経 常 費	2,600,000
事 業 費	0
予 備 費	10,227
計	2,610,227

聞こえて救われる

だから、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と、お念仏を称えて救われるのではないのです。聞こえて救われるのです。その「聞こえた」というのを「信」というのです。何が聞こえたのか。如来様のお心が聞こえましたというところが「信」なのです。信心の心とは如来様のお心のことです。よび声を通してわが「いのち」に届いている、如来様の大きな暖かい「いのち」、お心が届いたら、ああ「わしが」じゃなかった、と「我」の間違いがほんとうに知らされるのです。

私たちはこの身がある間、そのときはそうだと思っても、またすぐ「我」が出ます。だから何かにつけて、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏とお念仏を申しながら「わしが」じゃなかった、「わしが」じゃなかったと「我」を打ち破ってもらって生きるしかないのです。この身がある間はお念仏とともに歩ましてもらおうしか、私の救われてく道はないのです。そういう教えが、浄土真宗という教えです。正しく生きる道聞いて、ああそうか、それならわたしは正しく生きられるという人は、聖道門へ行ったらいいのです。私たちがほんとうに教えを聞かしてもらったら「つ

まらんやつがおりました」となるのです。しかし、そんな私が救われて行く道が与えられたのです。そんな道を教えて下さった親鸞様のご恩を喜びながら、生きていくのです。「如来大悲の恩徳は身を粉にしても……」と、親鸞聖人は喜ばれた。私たちが如来様のご恩を喜びながら、親鸞聖人のご苦勞を喜びながら、お念仏とともに生きていくのです。しょっちゅう「我」に戻りますが、戻るたびにお念仏申しながら一歩一歩踏み出しながら生きるのです。身のある間はなかなか「我」から完全に抜けきらないのです。しかし、いつかこの身が終わると同時に仏様にならせていただくのです。そういう教えが浄土真宗であります



麓二区世話方

\*\*\*\*\*

広福寺世話方のお一人として長年ご尽力頂きました中村守氏が世話方の役をこの度辞任されました。お引き留めさせて頂きましたが高齢を理由に固辞されました。その真摯なお人柄で、寺のためにひとかたならぬお世話を頂いて参りました。会計、受付、書の腕前の發揮と、いつも骨惜しみせず御活躍頂きました。心より御礼を申し上げます。

後任といたしました。同地区で以前から寺のために様々な協力を頂いてきております。堀内拓氏に世話方をお願い致しました。よろしくお願いを申し上げます。



堀内 拓 氏

九十歳のお祝い

数え年または満で九十歳になられた方に、本山から「祝詞」と記念の「木杯」が贈られます。広福寺へ御連絡下さい。証明書等は不要となりましたので、お名前と生年月日をお知らせ頂ければ結構です。



◎二万円の広福寺勸金◎

一戸あたり一万円の勸金とさせて頂いております。寺の教学、寺務、管理、営繕費等になります。

◎二万円の広福寺墓地管理費◎

勸金と同時に納入いただける方はよろしくお願いたします。

◎三万円の本山負担金◎

すでにお知らせ致しましたように平成二十三年の親鸞聖人七五〇回大遠忌法要に向けて特別負担金のお願いが参っております。一戸あたり総額三万円をお願い申し上げます。平成十九年までに、一括または分割で、集めさせて頂いております。

# 報 恩 講

浄土真宗の開祖親鸞聖人の命日の法要です。真宗門徒の生活は「報恩講に始まって報恩講に終わる」といわれ、もっとも大切な行事です。仏具のおみがきをして、荘厳(しようこん)も最も正式に行います。本山御正忌報恩講は十一月二十一日から二十八日まで勤まります。今年も当寺住職も、二十七日の通夜布教と進行役で上山致します。月経などで御迷惑をおかけしますがお許し下さい。

広福寺の報恩講は例年通り、十一月七日と八日です。ぜひともお参り下さい。

◎11月7日(月) (おとぎづき)

▼午前10時 初日中 登壇

説教二席

出雲崎 万因寺 高橋速円師

▼午後7時 初夜 行譜正信偈

聞法会員とおつとめ

ビデオ上映

◎11月8日(火) (おとぎづき)

▼午前10時 満日中 登壇

説教二席

須 頃 西照寺 原 泰雄師

# 女 性 講

◎11月30日(水) (おとぎなし)

▼午前10時 舌々正信偈

説教二席

月 潟 梵行寺 木村俊尚師

11月の夜の聞法会は、女性講があるので、お休みです。

「門徒式章」をご着用ください

広福寺本堂庫裏落慶記念の「門徒式章」寺の行事、ご法事するときなどにはぜひご着用下さい。真宗門徒のしるしです。



暑い盆参の日も……



おときは、涼しく、一度で。

## 来 年

### 平成18年年忌表

一	三	七	十	十	平	平	平	平	平
周	回	回	回	回	成	成	成	成	成
忌	忌	忌	忌	忌	二	六	十	十	十
七	三	三	三	三	年	年	年	年	年
十	十	十	十	十	昭	昭	昭	昭	昭
七	七	七	七	七	和	和	和	和	和
年	年	年	年	年	三	四	四	四	四
					十	十	十	十	十
					二	五	五	五	五
					年	年	年	年	年